



3

第 3 回

フームスの会

お知らせ

日時、'74年3月24日(日)
午後1時～4時
所、イギリス館(横浜)

復刻版

長い春がもうそこまで来ています。
会員の皆さまにはますます活躍のことと存じます。
フームスの会も間もなく開会式をむかえようとして
いますが、それにふさわしい内容を盛りこんだ第3回
フームスの会を開催しました。午前中は桜井の散策
を、午後は見附しの美しい池が見える丘公園(白亜
の洋館イギリス館にてフームスの音楽の一時をどうぞ。

ご家族の方、会員外の方の参加も大歓迎です。

'74.2.15
フームスの会
運営委員

オイギリス館への道
(旧イギリス公使館)

a. 横浜駅
22番

市バス利用
(市が見える丘公園)
下車

b. 駒木坂より
11, 20番

同上
いずれも同趣のすぐ
前に停車します。

* 当日の主な内容

- | | | |
|---|---|---------------------------------|
| 1. 講演
(作家) 小金 勉氏
— フームスの音楽を
ささえるもの — | 2. 演奏
ピアノ三重奏曲 第1番
疾奏
P. 鹿野のり子さん
V. 永田邦子さん
C. 加原真理子さん
(コンクール優勝)
若若しく美しい初回の傑作
を若いメンバーで披露して
いただきます。 | 3. その他
洋画上映
次年度に
について。 |
|---|---|---------------------------------|
- 作曲家の小金 勉氏は「現代音楽を語る」(岩波新書)等の名著があり地論家としても知られています。氏は自らの明解なフームス論が期待されます。

* 当日次年度会員手帳の受付けも行います。なお恐縮ですが事務室により
会員登録料を 社会人 3000円、学生 2000円 に変更させていただけ
ます。ご協力をよろしいいたします。

(運営) 駒木坂中 1-12-21, 2610425, 72 5482 田中

1974年3月24日 「第3回 ブラームスの会」報告

1. 講演 小倉朗(作曲家) —— ブラームスの音楽をささえるもの —— (要旨)

ブラームスは一般に「新古典主義」とよばれているが、しかしストラヴィンスキーやシェーンベルクのそれとは内容が非常にちがう。ここではブラームスの器楽、とくにシンフォニーや室内楽を中心にして、ブラームスにおける「新古典主義」の問題を考えてみよう。

まずブラームスの前後の時代の関係から出発する。音楽の歴史は植物の自然林が形成される過程に似ている。つまり草原の時代、灌木の時代、大木の時代、さらに薦がはえたり、場合によっては森林が密集して自分から滅ぶのと同じような形をとる。バロックはある意味で灌木の時代であり、それを集約した形でバッハという大木が現れる。しかしそれはあくまでも横の線によって織られた多声の音楽であり、同じ大木でもベートーヴェンのそれとは質が違うものであった。

所でモーツアルト、ハイドン、ベートーヴェンの時代において、音を縦の関係でとらえる和音構造による構成的な世界ができる。きれいな、気持ち良い音とかふし(節)をうまく組合わせることによって、音だけでは出せない迫力を出すことである。このように古典の時代とは、音や色や言葉などによって、それ以上のものを創り出そうとした時代であり、芸術の本質的な問題に迫った時代である。しかしこの時代は非常に短期間であった。

ロマン派の時代は古典派が本質的なものに向かって求心的に行動し、それを達成した後にやって来る時代である。それは多様性に向かって進もうとする時代であり、本質的なものを利用しながら、表情的な多様な世界に展開していく芸術家の世界であったということができる。ロマン派の作曲家はすべて古典に対して尊敬の念を抱いていた。しかしハイドン、モーツアルトに対するベートーヴェンの感情と、ベートーヴェンに対するシューベルトのそれとの間には決定的な違いがある。「ベートーヴェンの後に私に何が出来ましょう」とシューベルトは語ったが、彼は自分の目的と仕事とが分裂した人生を経験したと思う。シューマン、ショパン、ベルリオーズ、ワーグナー等もまた古典派の作曲家を尊敬していた。「自分が音楽家になったのはベートーヴェンのお陰である」とワーグナーは述べているが、しかし彼の音楽は構成的なものではなく、その意味でベートーヴェンとは全く別の音楽である。

彼はベートーヴェンを尊敬しているようで、実は背中を向いている。つまりロマン派は古典の本質的なものを財産にして、それから遠心的に行動して行く。さもなければ、他の世界を見つけることからである。これはまさに大木に対するツタの関係に似ている。

ブラームスは自分の内にロマンティックな旋律性、和音の微妙な表情を持ちながら、自然の摂理に反して、つまり時代に逆らって古典の本質的なものに求心的に行動しようとした作曲家である。フルトヴェングラーは『音と音楽』の中で「ブラームスは音楽史上初めて出て来た近代的な作曲家である」と述べている。現代でも多く見られるが、昔から過去と自分の時代とをはっきり分け、自分の時代に出来ることをして次の時代に行こうとする作曲家が多い。ベートーヴェンもまたその一例である。しかしブラームスは自分の時代のものを気質的に持ちながら、昔の構成的な仕事を捨てた。ここに美学者の言うブラームスの「新古典主義」がある。この悪戯苦悶ぶりはかなり大変なものだったと思う。事実、彼は細かい構成的なものを準備してからシンフォニーの作曲に向かい、それを仕上げるのに15年もかかった。「古典は神様達であり、自分達は人間である」とブラームスは述べている。この様な古典に対する見方はワーグナーのそれよりもかなり深刻である。彼は古典に見られる構成の力を熟知していた。音だけでは出せないある力を後世によって出そう、しかもロマン派の中で、否、それによって生きようとした所にブラームスのドラマがある。

◇その他、次のような質疑応答がありました。

本田：小倉先生は『音楽現代』(1968年11月号)の中で「今日作曲家がブラームスと真に出会いすることは困難である」と言う様に述べられていますが、先生とブラームスとの出会いについて出来るだけ具体的にお話願いたい。小倉：初め21、2歳の頃はブラームスが嫌いだった。重苦しく霧の中に包まれ、全部が曲線で出来ている世界みたいであります。晦渋(かいじゅう)で混沌としているように思われたからである。今でもそうだが、自分は古典的なものに惹かれ、ロマンチックなものに対して抵抗があった。その頃はフランス音楽、特にラヴェルが好きで、ドビュッシーについての理解はバルトークが分ってからである。從ってブラームスとは一生縁がないだろうと思っていた。しかしローゼンシュトックに学んでからベートーヴェンを再認識し始め、その後バッハやモーツアルトに対する理解がブラームスの方にも繋がって行った。それはベートーヴェンの構成とブラームスの構成や彼の狙っている仕事の共通点が自分を引っ張って行ったように思う。特に第1番のシンフォニーにショックを受けた。これを分からなければどうしようもないと思った。そして(太平洋)戦争が終わった頃、やっとブラームスの急所のようなものが分ったが、それは絵描きがやるように、ブラームスの模写をやって15年位してからである。けれども、あのドイツ古典とブラームスのお陰で自分は戦争を無事に生き延びられた感じである。

染川：モーツアルト愛好会の会誌の中で、ブラームスの音楽は『森繁ぶし(節)』と言うように述べられているが? 小倉：ブラームスの節(ふし)はドイツ民謡等の非常に親しみやすい節(ふし)から出でて来ている。あのような旋律でシンフォニーを書くことは実に難しいことなのだ。「靴屋のおばさん」でも分かるような分かり易い旋律と構成の力とを合わせることによってブラームス独自の世界が形成されるのである。

大崎(2023追記 会場より 桐朋学園大音楽学講師)：

18世紀後半から20世紀初頭の音楽を支えているのはトニカとドミナントの調的な緊張関係である。シューマンやワーグナーの「トリスタン和声」に於いてすら、この調的緊張関係無しには考えられない。一方モーツアルトやE・バッハの多感様式の中にも既にロマンティックな傾向が見られる。その意味で19世紀ロマン派と古典派の間には色々な違いはあるにせよ、本質的な違いは無いのではないか。

小倉：調的なものは概念的に捉えられるものでは無く、実感として感得されねばならない。絵描きにとって物の形は目に見えるものと深い関係があるのと同じ様に、音楽家にとって調性は深い関係をもっている。即ち、それは音楽の意味を支えるものである。現代から見ればロマン派も古典派も同じ様に見えるかも知れない。しかし技法的には同じでも、そこには態度の違いがある。ロマン派に於いても古典の財産—3和音体制の機能和声ーを継承し、その上で構成的なものに積極的に、それを再び自分の時代のものに変えながら、構成的な形を取ろうとした人もいる。そして最後の段階として、見えるものを画いたり調的に書くことを止める時期が来る。遠心的に行動することによって、もはや本質的なものの力が及ばない領域にまで飛び出したのが現代である。

(文責 本田)

1. 演奏

ブラームス作曲 ピアノ三重奏曲 第1番 作品8

P.鹿野のり子 Vn.永田邦子 Vc.藤原真理

『おことわり』 小倉氏の講演の要旨は編集者の責任において、かなり自由にまとめました。紙幅のみならず、編集者の非力のため当日の生々しい雰囲気をお伝え出来なかったのではないかと畏れます。もしも誤解や誤謬があればご容赦下さい。最後に小倉氏をはじめ、演奏者の皆さまに厚くお礼申し上げます。(本田記)